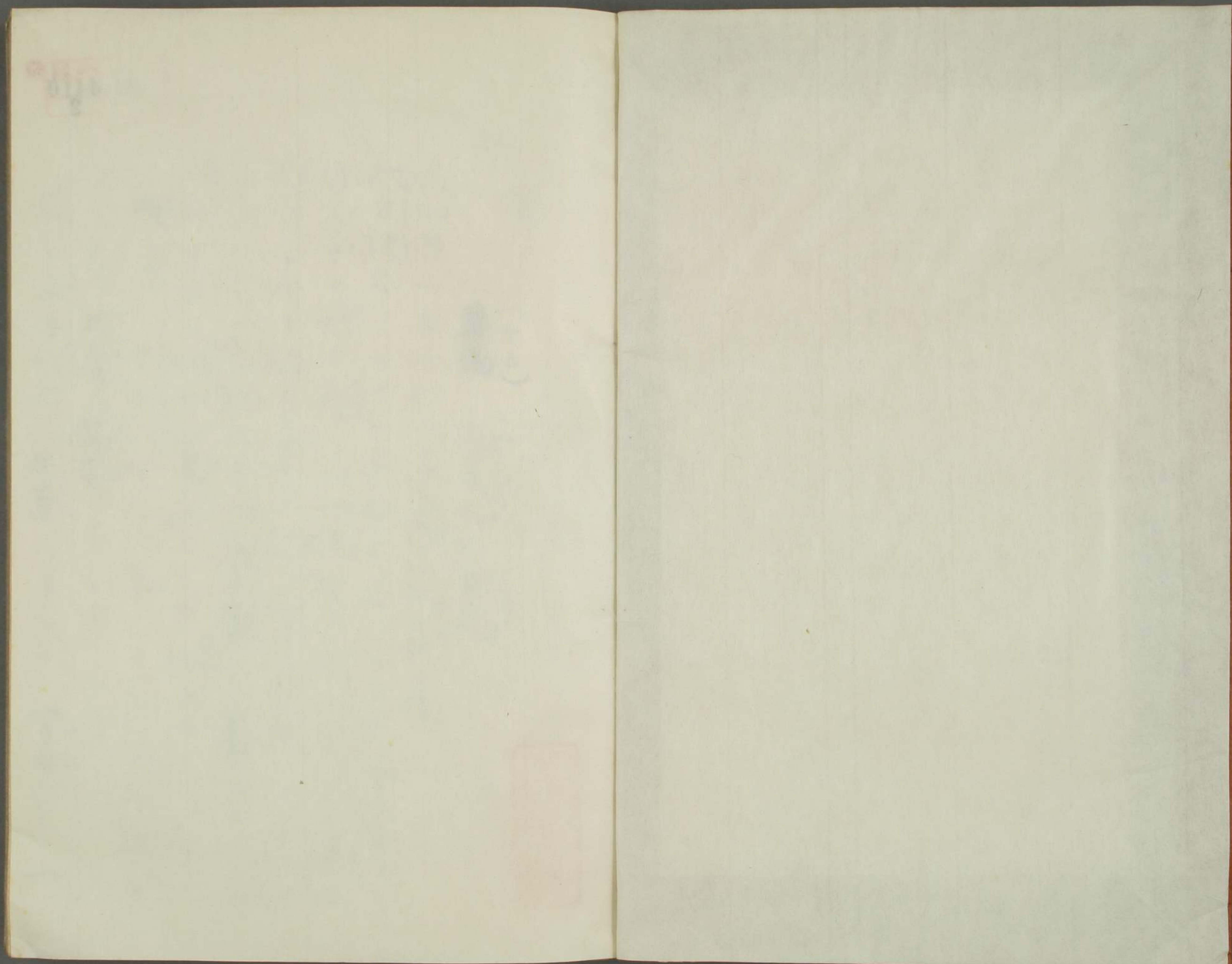


~14
4410
2





四月一日の
 日記
 此の日記は
 子の憎き
 子に
 記す
 粉山椒の
 噺
 表紙に
 見ゆ
 何れ
 今
 一

(十三)

西美人の日記



へ14特
 4410
 2

可い向の... 續けよん... 見...
 思... 辨... 知... 説教...
 風邪... 神... 私... 知...

寝て... 夜更の... 襪... 所... 拾... 椒... 振... 抑... 向... 高... 軒...
 思... 思... 思... 思... 思...
 158

何れにやら 和はら 澤へ出。 起。 夏は見え 秋は涼。 此方と見
 紙捻く 鼻の 穴の中 意地悪。 江
 今日 されとま の江
 かのふりふり 毎日の様 儼々

〇 四月二日 (ほ) 女 (輪鍵) の向の心
 あつた 奴め 何の書か 顔見て 訝し
 笑ら顔 何ぞも 私の口 書
 霞の口 覺るは け
 女は 口を 何を するに け
 夫の 口を 何を するに け
 夫の 口を 何を するに け

輪の 飛ぶ 長保ち するは
 残念

噓をくた 奉当ん 相変
 無駄澤山 けれを しては
 咽喉之所 御存知 遺 開
 極の 御 後生
 不呼よ 頂戴
 教へて 讀
 教へて 讀

疑の疑問の意を論私にまぐ
 けれを 増 知
 教へて 現
 教へて 讀
 教へて 讀
 教へて 讀
 教へて 讀
 教へて 讀

前 玉子 黄色
 何様 胸 見
 御飯 出 来
 黄色
 是れ 物 交
 間違

御飯 何様 胸 見
 黄色
 是れ 物 交
 間違
 114

の四月四日（ほつ子のち）
 のついにあり、いふは新参りの
 の粉の入り、知つていふ。
 の文の粉を聞違へて、
 の思ふところ、
 の飲料の係りのつと、
 の後、

ぼくらの、
 見態も真似、
 不埒な、貴女、
 喉の直賣、
 快心持、
 涙言、
 片栗粉、
 斯、

席巻の席巻
 大いなる度三度聞
 ちりちりい
 兄談
 津本

四月五日
 あり難い
 巧情
 あれでも神経
 顔と感
 河豚の
 席巻と面相
 無論
 無
 揺

合ふ〜
 山過〜
 有難〜
 結〜
 難〜
 澤山〜
 好都〜
 骨書〜

私是〜
 可〜
 佛〜
 何〜
 天運〜
 餘所〜
 遊〜
 見〜
 裸〜
 御存知遊〜
 來〜
 爲〜

中〜
 汝度了〜
 吳〜
 能〜
 切〜
 手〜
 手〜

返りなしたん
 けろども、今目には
 見附つて
 手禱片外、以て置
 手禱片外、癖の有
 見、今日、片外、
 落ち、馬鹿、附
 物、無、手禱、拾、取

の、の、の、の、と書
 私の裸は
 笑、顔見
 出、神、是、教、て
 始、り、打、り、明、け、ら、れ
 生、ま、れ、て、
 儻、吹
 仁

おんは輪の鞅かたかた までたらり

四月十日 (あつこ) 暇あま 入いり の言ことば

親おや の病やまい ちとて 官くわん け家いえ の祭まつり ちほは

戯あそび ちとて 邪よこしま 魔ま が無な け 却かへ ちとて可よし

い。あつこ 記し の書かき を落おち ちとて 二ふた つ目め

食物しょくぶつ とほはちとて 忘わす ちとて 置お ちとて 尻しつぽん ちとて

て嚴命げんめい のあつこ。 此こゝ 海軍かいぐん の海軍かいぐん の度尉たうゐ ちとて
本ほん 大だい ちとて 保護ほご 城しろ 此こゝ の存在そんざい ちとて 認め ちとて

物もの を 故ゆゑ 昨きのう 夜よ ちとて 後生ごせい 大事だいじ ちとて 飽あ ちとて

可よし ちとて 其その 暇あま ちとて 入いり ちとて ちとて

又また ちとて 閑ひら ちとて 後あと ちとて 朝あさ ちとて 見み ちとて

○四月九日（わづら子のも）
 急須の柄手のみを如彼の
 飯粒のついでに違に
 思標離討
 持
 薬劑師の拵
 粉をばく

便所へ懸て手回を取
 便所へ行
 願
 景物
 助
 澄

其藥劑師
 梅くくくく
 顔付さ
 槍
 持さるる
 息止るる
 顔色も蒼々たる
 減るる

二子とて十個とあり
 美しきおのほり
 貴女使
 斯く聞て思へる
 皮肉り
 備へるる
 穢味
 今度新奇

一時使して、
 是こゝに、
 箱はこのなかに、
 程ほど智ち慧ゑの出で、
 酷くの運命めい、
 其その包ふくの獨創どくの新工こう、
 留とど守もと、
 是こゝに、
 明めい朝ちやう使し、
 是こゝに、
 手て段だん

以前いぜん試し験けんして、
 頂たか戴だいして、
 持もつて、
 貴き女にょ監かん査さ役やく、
 薬やく劑じ師し以も上じやう、
 比ひ牝びん品ひんを、
 腕うでに、
 偉ゐい、
 見みて、
 貴き女にょ朝ちやう寺じ水すゐ使し、
 審しん査さ官くわん、
 然しから、
 然しから、
 然しから、

開_{ひら}く。しこしこ。
 直_{ちか}し。しこしこ。
 滞_どる。遊_{あそ}ぶ。
 儔_{とも}の。私_{わたし}に。聞_きこ。う。そ。う。な。し。こ。
 沸騰_{ふつとん}。し。こ。
 舞_まう。そ。う。な。し。こ。
 驚_{おど}ろ。う。そ。う。な。し。こ。

滲_{しみ}る。残_{のこ}り。し。こ。
 我_{われ}の。巧_{たくま}い。是_この。時_{とき}に。あ。ら。う。
 意_い味_み。あ。ら。う。し。こ。
 包_{くるみ}。あ。ら。う。し。こ。
 態_{げい}。あ。ら。う。し。こ。
 知_ちる。あ。ら。う。し。こ。
 喜_きぶ。あ。ら。う。し。こ。

あつちのうらぶらぶらとくくるもー、又、
 粉を遺つては、
 怪しむる。薬劑師、馬鹿々々、
 費下り、頂、見、洗、粉、顔、所、沸騰、可、
 極、返報、馬鹿、戯、置、

の四月十日(ほ)の(痛)の代、
 騰、限、解、
 沸騰、私、
 粉、

物、言、く、下、真、倉、見、る、こ、思、
 侵略的、成、ゆ、な、！、

渦巻く... 水... 波... 浪... 潮... 汐... 潮... 汐... 潮... 汐...

是の湯上... 湯... 湯... 湯... 湯... 湯... 湯... 湯... 湯...

其のヤ... 金... 聲... 聲... 聲... 聲... 聲... 聲... 聲...

其のヤ... 金... 聲... 聲... 聲... 聲... 聲... 聲... 聲...

其のヤ... 金... 聲... 聲... 聲... 聲... 聲... 聲... 聲...

其のヤ... 金... 聲... 聲... 聲... 聲... 聲... 聲... 聲...

若神... 叔母... 家... 行... 所... 謂...

單純... 歴訪... 歴訪... 歴訪... 歴訪... 歴訪... 歴訪... 歴訪...

單純... 歴訪... 歴訪... 歴訪... 歴訪... 歴訪... 歴訪... 歴訪...

單純... 歴訪... 歴訪... 歴訪... 歴訪... 歴訪... 歴訪... 歴訪...

單純... 歴訪... 歴訪... 歴訪... 歴訪... 歴訪... 歴訪... 歴訪...

銅壺... 活動寫真... 撒... 急... 急... 急... 急... 急...

銅壺... 活動寫真... 撒... 急... 急... 急... 急... 急...

銅壺... 活動寫真... 撒... 急... 急... 急... 急... 急...

銅壺... 活動寫真... 撒... 急... 急... 急... 急... 急...

○四月十一日(あつ子)の(香油)の同達と
 へた余太は珍りし多しにやふりたて毛の
 素地は推替も魁て光澤の出る。カ
 争つれま。酒落るほ。大騒
 閑達
 騒

垢摺して思ふ。毎通の油。手
 へはま。片膝。指の手平と仰向
 蠶の足食ら付。文
 私行り回く。あつ子。あつ子。

壺 換 彼方 此方 控
 種 濃 塗 醋 遇
 櫻 殿 見 横 替 縦 取 更
 計 何 動 油 奇麗
 遍 置 直 夫 厨

絶 濃 通 油
 馬鹿 油 可
 位 注 通 油
 油 貴

の毛見... 棒... の道... 急...
 彼... 為... 為...
 此... 為... 為...
 貴... 出...
 山... 度...
 貴... 出...
 貴... 出...
 貴... 出...

の... 何... 瓶...
 の... 香油... 分...
 其... 附...
 夜... 湯... 帰...
 大... 勢...
 泣... 出...
 聲...
 積...

○四月十二日(ほく子)の(事)の(夢)の(見)

私の此家(うち)に来(こ)て、
 その(考)の(進)の(食)の(戯)の(可)の(可)の(可)の(可)
 材料(かざい)の(戯)の(可)の(可)の(可)の(可)の(可)の(可)
 巧(たくま)の(考)の(進)の(食)の(戯)の(可)の(可)の(可)の(可)

巧(たくま)の(考)の(進)の(食)の(戯)の(可)の(可)の(可)の(可)
 の(考)の(進)の(食)の(戯)の(可)の(可)の(可)の(可)

戦

頭(あたま)の(可)の(可)の(可)の(可)

流(なが)の(石)の(可)の(可)の(可)の(可)

吹(ふ)の(出)の(可)の(可)の(可)の(可)

流(なが)の(石)の(可)の(可)の(可)の(可)

吹(ふ)の(出)の(可)の(可)の(可)の(可)

行つて、素早に中へ入る。

 何れも何れも、所へ行く。

 どの、あつた。帰る。

 素早に、素早に。

 正味二分間位、真逆。

 咳が出、涙が出。

 功勞、孝行。

行つて、智慧。

 閃光、臺所。

 胡椒、粉、持。

 行儀の好。

 見ると、妙了。

 直是。

 裏庭、方、出。

 貴女、今斯。

澤山は無... 澤山は有... 澤山は... 澤山は... 澤山は...
 柄... 沢山... 沢山... 沢山... 沢山...
 流... 物... 所... 口...
 愛... 顔... 持... 是... 貴女...
 澤山... 澤山... 澤山... 澤山... 澤山...

大悪戯... 材料... 敵... 包... 知... 始... 終... 使... 御... 授...

御覽と。今持と。

 耐。持。誰。本。警。持。

 場。合。思。物。持。居。

 咳。拂。

奥勤。

 儘。

 體。無。

 現。

 斯。

 貴。

 戦。線。

ハ
ス
コ
ト

のほろろつぼ
 麦雀 好物 好物 好物 好物
 櫃の粉 什 御飯粒 砂糖
 乾 炮烙 熬 砂糖 何
 鷹の糞 手遊物 飯 利用
 巧 準備 置

顔 踈 顔 踈 顔 踈
 思 思 思
 何 思 何 思 何 思
 軍鶏 糞
 顔皮 剥けて
 顔皮 剥けて

〇はりてある(あ)こ子(こ)の(こ)糊飯
 緒(お)居(い)る(る)家(か)政(せい)を(を)賄(ま)つて

醒(さ)め 可笑(わ)か(い)い 猫(ね)の食(た)べ残(のこ)り 醒(さ)め 答(こた)へ 鮎(あ)つ貝(が)い 遺(い)つて
 興(き)奮(ふ)ん 考(か)考(か) 様(や)子(こ) 聞(き)く 遺(い)つて
 醒(さ)め 可笑(わ)か(い)い 猫(ね)の食(た)べ残(のこ)り 醒(さ)め 答(こた)へ 鮎(あ)つ貝(が)い 遺(い)つて

始(は)り 通(と)う 砂糖(さ)つ糖(とう)を交(ま)えて 好(こ)い 言(い)ひ 例(れい)
 顔(か)ん 顔(か)ん 為(な)る 様(や)ん 餘(あ)り 細(こ)工(こう)の旨(あじ) 夢(ゆ)見(み) 様(や)ん
 行(い)き過(か)す 思(おも)い 自(じ)分(ぶん)を 頻(ひん) 鼻(び)神(しん)經(けい)
 眉(まゆ) 顔(か)ん 顔(か)ん 頭(か)ん 捻(ひね)り 出(で)す 頻(ひん) 鼻(び)神(しん)經(けい)

北の減支度
 家の来
 のあ、尺度見
 その竹の棒は何
 加減と見、まア、水準
 水準器持、大州の橋材の停、水量杭
 炊きの棒、御飯炊、度盛
 杖持、御飯炊、度盛
 御飯炊、度盛

主婦同様、任務服
 掛、来、日、家政家
 以、臺所向き、事、為、それ、は
 増、耻、あり、や、為、い
 蒸し物、指、寄、物、製造、行、騷
 頸、引、き、料理案内、と、臺所、持、行、騷
 御飯、と、と、炊、思、と、其

胸が... 焦燥出た。見て、私の...
 見... 今度... 出... 水氣...
 結局... 湊寸... 急... 玉舞...
 後... 舌...

... 唱歌... 焦燥... 箱... 出... 舌...
 ... 箱... 出... 舌...
 ... 箱... 出... 舌...
 ... 箱... 出... 舌...

朝私に釜の下に焚き附ける番の時
 不届其流星の揚げる火の目に見え
 捨てる焚き附けり
 利用を考へて
 焚き附けり
 方々可い
 無廢物
 玉の飛出す時
 一々敷居
 時中
 敷定
 時間
 無
 其玉の飛出す
 玉の敷
 敷
 玉の敷
 敷
 玉の敷
 敷

散々見
 氣絶
 散々見
 氣絶
 散々見
 氣絶
 散々見
 氣絶
 散々見
 氣絶
 散々見
 氣絶

私、所為ちあま、
 花だの志、
 自分氣、
 棚、
 切、

一、度、
 出、
 聲、
 人、も、
 漸、
 是、
 私、
 見、
 返、
 報、

利用、
 氣、
 程、
 廢、
 呼、
 揚、
 知、
 耳、
 奴、
 全、
 下、
 懸、
 私、
 何、

今朝の釜煎の攻り付けて
 此方への攻り付けて
 今朝の釜煎の攻り付けて
 右へは只の釜煎を掛けて置いて
 御飯釜の下の焚き付ける
 湯釜の湯を沸かす
 湯釜の中の湯を
 御飯釜の下の焚き付ける
 湯釜の湯を沸かす
 湯釜の中の湯を

今朝の釜煎の攻り付けて
 右へは只の釜煎を掛けて置いて
 御飯釜の下の焚き付ける
 湯釜の湯を沸かす
 湯釜の中の湯を

巧行い軍之命ふら。

やうしものと思つて。林女附つて置い

るのりて、リ判口ん茶の間來て灰振

り。御ちる。其所狎それは臺所

行く。

下はッ、釜の底の火の紅。

と。

と餘所行の大聲の思那。

と、わあ、と、様、思那。

と、思那。

と、思那。

釜の火の上居物は誰か。

誰か釜の底の。

誰か釜の底の。

釜の底の。

釜の底の。

釜の底の。

釜の底の。

釜の底の。

釜の底の。

過

檜木の朽木

底に破裂

涙の破裂

価値代り

両方を失束

青山墓地

墓参り 出 顔にツツの 暇 上部の手引 行く 折角智慧の 智慧を出 其智慧を 大死に 真利の悪 其の 拙の 智慧の 働 餘所行き 駒下駄 前鼻緒の 心の麻を 見 揉ん

ぞうり、白く、彼の、苦は無い。買った
 けり、人形、の、馬、や、り、巧、行
 緒、の、墓、行、余、で、何、も、目、の、遇、一
 と、考、末、の、蝙蝠、傘、の、療、治、
 是、は、骨、の、折、の、蝙蝠、傘、の、骨、
 折、の、骨、の、折、の、骨、の、折、の、骨、

踏、返、す、所、来、る、と、う、れ、は、お、奴、の、馬、を
 鼻、緒、の、心得、を、直、く、同時、に、あ、ら、う、
 困、切、り、
 の、工、夫、は、巧、行、の、代、り、鼻、緒、を
 私、に、私、に、い、や、り、ま、さ、る、ら、う、の、今日、

開の骨の弾機を螺旋釘無
 のコニパスの鑑の夫の曲
 けらまゝの成功の可らわ
 まらぬの奴の澄で其蝙蝠傘を醫
 して行私の色合の好傘を
 うらふの附け其所を私に取つて
 々しいの今に見る言つ氣の
 此は平氣で同行
 電車に乗つて日比谷公園前まで来る所
 様無
 日比谷公園前まで来る所

見
 ちのさ
 散歩
 誘
 構の御存知無
 公園の團體
 我の桃色のネクタイを附ける
 若神が幾らも唇
 頗強吹
 日照も可なり強
 獨言
 聞
 飛つて結

意地悪覺ぐも... 二つ... 考へて見...
 種々... 識... 澤山...
 十歳八歳... 学校... 毎...
 底意地悪... 様... 修業...
 先生... 色々教...
 今... 責... 活用...
 ... 出来...

何種... 無... 考へ... 差... 向...
 ... 更... 十... 鳴... 十... 鳴...
 ... 話... 絶... 睡...
 ... 始... 来...
 大方薬罐の蔓... 押し付...
 薬罐... 水... 勿論... 湯... 何... 何...
 子心... 丈夫... 用心... 何... 何...
 押... 覺... 始... 安心...

出でて。カ。是と繰返して。ゆに
 結局。薬罐の胴を。押す。理窟。
 呼吸。殺。返して。
 薬罐を引。返して。
 薬罐の底。浮く。様
 薬罐は。一分の三分の兼。合。言
 点。浮。軒聲。よ。中。
 私。は。次。の。間。一。行。の。行。の。行。

断と利用。安心。油断。此油
 勿體無。利用。其利。得。境遇
 在。私の義務。わ。
 居睡。物。潮。来。衰。
 旦酷。前。酷。衰。
 返。前。潮。初。前髪。
 薬罐。蔓。觸。第二回。つ。押
 前髪。旦後戻り。

続々。昨夜の薬罐も...
 殿悪戯。奴のは便所。居るやうぶ...
 今日好い。思...
 燈の油壺と心。油壺差...
 口金の所を持つ。口金...
 大屋の左の手に取って...
 掃除取。吊洋...
 出。口金...

で最も顛覆。如何無灰神樂！何...
 拔足する私。便所。遊...
 便所は調法...

御毎日々々。退治し工夫...
 何。毎日訝...
 知。知。知...

と何とやら偶然に遇ふ事あるまい
 の。そんな偶然で偶然さう矢張り天
 罰よ。あはけたい。萬歳よ。
 何所へ猫が知らぬ。不埒なる野良猫
 家の来て。魚を喰ひついで井の
 物の口へ附いて。私に猫は大嫌ひ
 奴め。是は江成心。私に猫は
 大嫌ひ。只足らん。心毎て。數類の猫
 大嫌ひ。憎む。憎む。猫は
 憎む。猫は。何とやらあり。何とやら

れて、壘は板の間に落こつて。拵微塵！ 油
 軍師は無論私にせよ。口金のカキを新
 落こして置いよう。

の四月二十二日。泥坊猫
 家の内
 策も見え。論断
 考へて。

打つてゐる。 ちか感。 せんをたぬかアカン
 ぼろぼろの 抜る足差し定、 頸を縮ませ腐
 身長を盗み足を縮めて 行
 膝と膝の 障子の方へ行く
 轉々 陰氣の 聲の 調あるを、 咽喉の奥の
 急振 返して 好んで 見たい
 猫の 神断 好んで 安排
 様子

見え見え 夫の 何と 位
 何れ 見え見え 居る 折る 折る 猫の 来
 臺所の 障子の 板の 隙間 へ 入り 来る
 白斑の 色見え 又 知る
 畜生 子姫 姫御前
 勇んで 身ぶる 何れ 知る 打つて
 何れ 知る 打つて

親共のふたり倍輪を扱って甘いサッカリな娘
 の給棒嬢の可愛らしい姿を可憐のそと
 畜馬の其様に見ると強面
 畜の煽動は昨日の我が持ち
 帰る来様を信じたい
 子猫の可愛らしい姿を障子
 の猫の可愛らしい姿を障子
 の可愛らしい姿を障子
 の可愛らしい姿を障子
 の可愛らしい姿を障子

此方では〜
 障子と廻り〜
 驚きの猫で〜
 程薄汚い〜足袋と〜居る〜
 免ち〜
 八月一日〜
 日記の中絶〜
 日記の中絶〜
 病氣〜
 親共は〜
 聞〜

の八月二日
 何れの大
 病氣
 附く句
 見
 氣態
 家真利
 盡

耐
 知
 明日は
 種
 悪戯

到底両方
 出来
 是
 出来
 何
 是
 防禦攻撃
 双
 行

の八月三日
 封切りかす巧行
 今朝の御飯は
 けりかすその癖
 居るの珍無類
 美人の可笑

のど
 捕虜の居る

何方

家
 男姑と座敷牢
 家兄は肉親
 家兄は頼
 家阿又
 取も釘
 野心
 彼通平謝
 謝
 謝
 刺
 物
 小姑
 天職
 持

附

アイヌ
 環
 厚唇 周囲
 唇 殆ど見
 環 全口大
 御當人
 見
 時 私面
 我慢
 苦
 通
 兄
 呼

了度
 新
 私
 吹
 其所
 離
 吹達磨
 女達磨
 真紅
 腫
 口
 周囲
 黒
 環
 痕

の八月の三日のほのまのの夜に
 此頃御飯の腐。腐。正面の御飯の扱。
 此の下手のひもと。此温氣で、
 のの腐。此温氣で、
 御飯の腐。腐。正面の御飯の扱。
 御飯の腐。腐。正面の御飯の扱。

墨松の吹の端。丁度口の當。所鍋

其黒い環、付く儘の顔、
 恐行、吃驚、
 得、私に、何ぞ、
 何ぞ、
 環、

早さき離り間ま第だ知ち望ぞう美み事こと最さい
 不ふ好こう臭くさい氣き今い朝あ炊い書か畫え
 瀬せ無な儘まま襲おそ撃げ私わたしははささりりのの
 炊い御ご飯い襲おそ撃げ私わたしははささりりのの
 不ふ好こう臭くさい氣き今い朝あ炊い書か畫え
 瀬せ無な儘まま襲おそ撃げ私わたしははささりりのの
 不ふ好こう臭くさい氣き今い朝あ炊い書か畫え
 瀬せ無な儘まま襲おそ撃げ私わたしははささりりのの

下した散さん々ず冷ひや醋すい過か下した散さん々ず冷ひや醋すい
 醋すい御ご飯い交まじ可か流なが知しららるるああ
 一人ひとり若わか臭くさいいい三さんとと流なが知しららるるああ
 一ひとり若わか臭くさいいい三さんとと流なが知しららるるああ
 醋すい咽のどッッ食くん
 下した散さん々ず冷ひや醋すい過か下した散さん々ず冷ひや醋すい
 醋すい御ご飯い交まじ可か流なが知しららるるああ
 一人ひとり若わか臭くさいいい三さんとと流なが知しららるるああ
 一ひとり若わか臭くさいいい三さんとと流なが知しららるるああ
 醋すい咽のどッッ食くん
 下した散さん々ず冷ひや醋すい過か下した散さん々ず冷ひや醋すい
 醋すい御ご飯い交まじ可か流なが知しららるるああ
 一人ひとり若わか臭くさいいい三さんとと流なが知しららるるああ
 一ひとり若わか臭くさいいい三さんとと流なが知しららるるああ
 醋すい咽のどッッ食くん
 下した散さん々ず冷ひや醋すい過か下した散さん々ず冷ひや醋すい
 醋すい御ご飯い交まじ可か流なが知しららるるああ
 一人ひとり若わか臭くさいいい三さんとと流なが知しららるるああ
 一ひとり若わか臭くさいいい三さんとと流なが知しららるるああ
 醋すい咽のどッッ食くん

日課の
 無
 蟬袋
 蟬頂戴
 及
 伯母の所
 伯母の所
 是
 外

か
 指揮
 置
 田舎
 悪戯
 置
 帰

○八月六日(ほ)まよひ
 幾迷つて蟬書齋
 種々書きまじり擠まな
 骨折
 研究の言つて此頃
 蟬の仇討
 蜻蛉の材料
 智慧の何
 思ふ附る
 蜻蛉の仇討
 蜻蛉の材料
 智慧の何

ほくこ驚
 内點燈
 何新
 歸來
 寐
 胸猶
 寝衣の手早著換
 胸猶
 ぼよもは着
 決の中
 はては
 蟬の値

下へ浪の
 私を、
 流に處置
 行のあつて
 巧行
 竊所の
 吸ひ
 急
 竊は
 出た
 智慧を
 直と
 出た
 直と
 處置

夜にちよき
 旦那様は
 竊竿と
 縁側
 鴨居
 所
 又明自使
 思
 知
 私
 物
 言
 奴
 便所
 方
 行
 自分
 私
 驚
 智慧
 然

是ふけても好氣味を
 驚く出で
 毛は吸い付いて
 り畏れこれ鬼角
 て度毎に力
 痛言我慢して
 何の髪持して扱
 痛いと涙を流
 驚き髪持して扱
 結局は
 驚く出で
 毛は吸い付いて
 り畏れこれ鬼角
 て度毎に力
 痛言我慢して
 何の髪持して扱
 痛いと涙を流
 驚き髪持して扱
 結局は

子りて譯の分
 振ってかつもの對向
 一緒に出して
 論の勝の皮の掻
 邊の音
 丁度
 張る駈け出
 呆氣取
 是ふけても好氣味を
 驚く出で
 毛は吸い付いて
 り畏れこれ鬼角
 て度毎に力
 痛言我慢して
 何の髪持して扱
 痛いと涙を流
 驚き髪持して扱
 結局は

和服を行
 物言々 一領持 持 已
 斯身長の低い 所持 持 物織
 可哀 言々 舊調 何 舊調は 舊調
 懐中 入時 獵師 何 舊調は 舊調
 調身體 著時 誰 誰 舊調は 舊調
 置 更 何 為 誰 誰 舊調は 舊調
 新調 新調 舊調は 舊調
 新調 新調 舊調は 舊調

今 日 七 日 出 席 會 不 高 思 附 和 服 行
 評 論 抽 兩 面 思 即 哀 思 痛 々 前
 身 附 近 居 七 達 執 考 見 直 接
 聞 譯 思 女 關 評 論 隨 分 讀 直 接
 心 地 問 題 思 痛 々 前
 姑 沈 思 囚 不 高 思 附 和 服 行
 今 日 七 日 出 席 會 不 高 思 附 和 服 行

筋を搔き回して取出して着て見
 氣に通して長の流行したる
 嘘搦思ふ
 指を見當り好く加減に見料
 好く氣なるは居る
 氣の附

見馬鹿
 知見是
 何組
 譯無事
 縫殿頭
 直下位
 夏羽織
 家縫殿頭
 縫殿權頭
 居る
 救羽織
 結つて貫
 離るる

迂闊 曲尺

男

鯨尺

勘定

學校時代の 算術 幾何学

経験

曲尺

況

目分量

長

三寸

思 頸 捻 見

即ち

長

